

ぜんたい

令和7年 10月

第78号

能登のために



震災と豪雨の被害から応急復旧工事を行っている町野川の今の様子

CONTENTS

巻頭言	2	我が水産多面的活動(サポート専門家 崎長威志)	18
全内漁連開催の各会議について		羽山伸一氏を偲んで	20
総務委員会・理事会を開催	4	みんなでやろぞ! 内水面(令和6年度実施団体報告)	22
ブロック会議を開催	4	内水面漁協(第48回)	26
外来魚対策事業の第1回検討委員会を開催	5	愛しきアユ(第51回)	27
みんなでやろぞ内水面漁業活性化事業の総合評価検討委員会等を開催	6	漁場生産力・水産多面的機能強化対策支援委託事業	28
第24回全国川づくり標語コンクール	8	日光支所から	29
第48回全国養鰯技術協議会・第56回養鰯振興全国大会	10	新会長の紹介	30
水産庁のニッチな仕事	12	業務日誌	30
漁協組合員を紹介します	13	職員のつづやき	31
我が漁協(石川県 町野川漁業協同組合)	14	新聞記事から	31
我が水産試験場(石川県水産総合センター内水面水産センター)	16	編集後記	31

全国内水面漁業協同組合連合会

漁業者(会員漁連)の傘下漁協組合員
漁業者以外の購読者

年間契約「四回発行」定価三、〇〇〇円(本体二、七八円)送料サービス
年間契約「四回発行」定価三、〇〇〇円(本体二、九〇円)送料サービス

単品 定価七五〇円(本体六八二円)送料別
単品 定価八〇〇円(本体七二八円)送料別

information

毎月3日から7日は「さかなの日」!



機関誌 ぜんたい 第78号

全国内水面漁業協同組合連合会機関誌
令和7年10月発行

発行人：全国内水面漁業協同組合連合会
代表理事長 谷 公一

編 集：本所 機関誌編集委員会

発行所：全国内水面漁業協同組合連合会
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町1丁目10番4号 丸石ビル4階
TEL：03-6260-9595 FAX：03-5296-2030
ホームページ：https://www.naisuimen.or.jp

印 刷：鵜川印刷株式会社
〒923-0053 石川県小松市河田町丁33番地

我が漁協

生き物の宝庫だった町野川の復活を願って

石川県 町野川漁業協同組合
代表理事組合長 一三三 秀仁



震災前の町野川

町野川は、かつて生き物の宝庫と言われており、ゆったりとした川の流れの汽水域には川エビ、真ウナギ、カニなど多様な生物が生息していました。

そのため、地区住民は釣りや投網、八目ウナギ、イサザ、モクズカニ漁と、自然の恵みを享受してまいりました。



川遊び体験



カワヤツメ

しかしながら、防災などの観点から、昭和58年に河口を一直線で日本海に流すという改修工事が行われ、生物の生息場所や隠れる場所が少なくなりました。

川の水を真つすぐに日本海に流すということで、大雨のとき川の増水を防ぎ、水を流せるということは、防災の観点からすばらしい役割を果たしておりますが、暴風雨などにより日本海が荒れた場合には河口付近に砂がたまるという状況が目立ってまいりました。

特に、近年は暴風が発生する割合が極めて多く、また、もともと砂のたまっていた場所を河口としたわけでありまして、河口閉塞になっても仕方ない状況かもしれません。

これまでの漁協の取り組み

漁協では、川に関心を持つってもらう活動として放流事業や川遊び体験などを地域住民や小中学生と一緒にに行ってきました。



高校生のカワヤツメ放流式



小学生と鮎の稚魚放流

また、川を守る活動として、定期的な河川清掃や生息調査のほか、根本的な環境を取り戻すため、川に関わる関係者の方々との対話を大切に考え、稚魚

地震と豪雨

そんな状況のなか、令和6年1月1日に能登半島地震が発生致しました。

最大震度7の揺れを観測する地震によって多くの建物が倒壊、輪島市内では大規模火災がおきました。
能登への大動脈である、のと里山海道が甚大な被害を受け、悪路、積雪、余震の影響で車両の通行が制限されたこともあり、地震被害状況の把握や災害復旧へ時間を要する事態となりました。

輪島市内の山間では、山腹が崩壊し、道路が寸断、漁協のあった町野地区も一時孤立し、地域の住民と支え合って避難生活を送っていました。

また、この能登半島地震の影響により海岸線が隆起し、河川の上流域では山腹崩壊が発生。河道をせき止めて複数の天然ダムが形成されました。

さらに同年9月21日には奥能登豪雨が発生し、町野川水系の天然ダム14箇所のうち7箇所が洗い流されるなどして消滅。下流でも堤防が決壊して氾濫による被害が生じました。

現在、左岸、右岸とも多くの土嚢を積み上げ応急復旧を行っておりますが、余りにも被害が甚大で、川は濁水が今でも流れている状況です。

今後、どのような工事を行い、町野川を復活できるのか組合員一同が見守っております。



豪雨災害で土石流や流木が押し寄せた町野川の様子



震災直後、両岸が大きく崩れている河川の様子

安全な川にしていくことは大変必要なことであると感じておりますが、かつての生き物の宝庫であった元の川に近い状況に復元していくことも重要であると考えています。

能登地方は少子高齢化が進んだ地域であり、この地震と豪雨の影響でさらに追い打ちをかける状況となつてしまいました。

そんな中でも世界農業遺産に登録され、トキの放鳥も行われるこの地域で

持続可能な社会への取り組みを行い、子どもたちにすばらしい環境を残していきたいと願っています。

地震後久々に調査のため川に入った時には魚の産卵が確認できました。自然界のこうした、たくましい生命力を励ましにこれからも組合員一同頑張っていきたいと、明るい話題も出てきていた矢先、令和7年8月に石川県に線状降水帯が発生、再び大雨によって河川の氾濫や土砂災害が起きました。復興半ばでの災害に「またか・・・」と心が折れそうになりますが、今まで積み上げてきた活動を形にするため、子どもたちにもふるさとの自然豊かな川を残していくために前を向いていかなくはなりません。

おわりに

末尾になりますが、昨年度、全国の漁連より、多くの義援金をお寄せ頂きました。皆様の温かいお心遣いに生きる勇氣をいただき、このふるさとの河川を守りたいという想いを新たにすることが出来ました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

併せて、全国各地で同様の豪雨被害に遭われた皆様に心よりお見舞いと申し上げますと共に、一日も早い復興をご祈念申し上げます。



左岸、右岸とも多くの土嚢を積み上げ応急復旧を行っている河川の様子



石川県の内水面漁業

本県は、日本海に大きく突き出た能登半島を有し、日本列島の中央に位置しています。

また、海岸線は、遠浅の砂浜域が広がる加賀海域、岩礁域が広がる能登外浦海域、急深な能登内浦海域、一年を通じて静穏な七尾湾など変化に富んでおり、それぞれの漁場環境を活かした多種多様な海面漁業が営まれています。

内水面においても県内最大の流程を持つ手取川水系と梯川水系や、県都金沢市内を流れる犀川、浅野川を始めとした中小河川や柴山潟、邑知潟等の湖沼まで様々な内水面漁業が営まれています。

漁業権魚種としてアユ、ヤマメ、イwana、カジカ、コイ等が放流されており、内水面養殖ではイwana、ヤマメ、コイといった一般的な魚種に加え、本県の食文化に根差し、全国的にも珍しいドジョウやカジカの養殖が行われています。

内水面水産センターの主な業務

ことを通じて禁漁区、期間の設定等アユ資源の管理に取り組んでいます。

ドジョウ増養殖技術開発

「ドジョウのかば焼き」は金沢の夏の風物詩として親しまれており、全国有数のドジョウの消費地です。

一方で食材としてのドジョウはかつて、県内でも多くとられた時期もありましたが、平成20年頃にはすべて県外産であることに加え、天候に左右されやすく入荷が不安定という状況でした。

そこでドジョウ養殖を県として普及することとなり、当センターにおいて、ドジョウの種苗生産技術と休耕田を利用した養殖技術を習得・確立することとなったわけですが、当時ドジョウの養殖は難しいとされ、全国的にも生産量は10トン程度、大分県、島根県、新潟県等数県で行われているに過ぎませんでした。



ドジョウのかば焼



養殖業者に配布されるマニュアル

当センターでは各種調査や飼育技術の開発、養魚技術や魚病対策の指導、放流用や養殖用の種苗の育成と配布、内水面漁業に関する啓発事業を行っており、今回はアユの資源調査についての取り組みとドジョウ増養殖技術開発、カジカ種苗生産についての取り組みをご紹介します。

アユの資源量調査

アユは全魚種の放流量全体の70%ほどを占め、当県の内水面漁業において重要な地位を占めています。

アユ釣りがこれほど愛されることとなった理由は古くは江戸時代までさかのぼります。

当時外様大名であった加賀藩は江戸幕府の厳しい監視下にあり、武芸を積極的に奨励することは、謀反の疑いをかけられる危険な状況でした。

そこで、藩主が武士たちに武芸の稽古代わりに重い竹の釣り竿を持ち、足元の不安定な河原を移動しながら忍耐強く

その後、ドジョウ養殖において問題となっていた次のような問題を解決し、養殖マニュアルを作成し養殖業者の育成を図ると共に、平成26年より、当センターからの種苗配布を開始しました。

- ① 採卵や稚魚の育成が難しい↓ホルモン注射による産卵誘発
- ② 養殖池から逃げ出しやすい↓養殖池からの逃亡対策
- ③ 餌の適量を判断しにくい↓定期的なザルにエサを入れて一定時間後に引き上げて摂餌量をチェックする。

更に平成28年度には「いしかわ里山どじょう振興協議会」を立ち上げ、かば焼き試食イベントを開催する等、消費者のいしかわ里山どじょうへの認知度向上を図っています。

魚がかかるのを待ち続けるアユ釣りを奨励し、彼らの心身を鍛えたというわけ



江戸時代のアユ釣りの様子を記した絵巻

その後時代が進み、江戸後期になりまずと、生活に困窮した下級武士たちの内職として加賀毛針が発展したこともあり、アユ釣りは単なる漁業の枠を超え石川の文化と密接に結びついて現代に至っています。

その後も、当協議会では養殖業者の技術研修会を実施するなど生産量向上に取り組んでいるところでありますが、近年は、令和6年の能登半島地震の影響や養殖業者の高齢化による廃業に伴い、生産量が伸び悩んでいる状況です。

カジカ種苗生産

一般的に「ごり」と言えばハゼ類の淡水魚を指しますが、石川県では昔から川に住むカジカを「ごり」と呼んでいます。体長7〜8cmで褐色、大きな頭に大きな口、飛び出した目と見た目はよくありませんが、上品なうまみに富んでおり、金沢生まれの文豪・室生犀星は、「ごりは醜いが、垢抜けし、風流な魚である」と表現し、こよなく愛したそうです。

代表的な

ごり料理には唐揚げや洗い、ごり汁などがあり、加賀料理の一つにも挙げられています。



カジカを使った加賀料理

かつては県内に広く生息し、金沢市内を流れる浅野川や犀川では、川底の石の下に潜むカジカを、専用の板で石を起こ



加賀毛針「画像提供：金沢市」



当センターでは手取川において遡上量、解禁日の釣獲状況、産卵状況について調査を行い、これらの動向を把握する

しながらザルに追い込むごり押し漁がおこなわれていました。

諸説ありますが、強引に物事を進めることを意味する「ごり押し」という言葉はこの漁法が語源ともいわれています。



ごり押し漁

天然カジカの漁獲量の減少に伴い、当センターでは昭和48年より種苗生産技術の開発に取り組み、採卵用親魚として天然親魚と養成親魚を併用し、稚魚用の餌としてミジンコを、親魚養成用にはウナギ用配合餌料や鮮魚やブタの肝臓をミンチにしたものを与えて養成することとで、種苗生産技術を確立し、昭和52年より河川放流、養殖用種苗の配布を開始しています。

現在は飼育技術の改良により、天然親魚を基に養成した親魚を用いてアルテミアと配合餌料で種苗生産を行い、河川への放流や養殖用種苗として配布を行うことを通じてカジカ資源の維持や石川の食文化継承の一端を担っています。